

しよろこびたり、されどまだほどまなければ、御ゆなどもなし、○中中なごんどの家○長のきたの

かた○信女信女も月ごろだにもおはせざりければ、おりあしきかさをいかにく○大大なごんどの齊○信信

もおぼしなげき、中なごんもいかにとおぼしつるに、月ごろいみじうほそりやせ、ありし人に

もあらぬ御ありさまをぞ、いかにおそろしくて、さまぐの御いのりをまつくさせ給める、かん

のとの、御かさかれさせ給つれど、御もの、けのけしきのいとおそろしくて、まだ御ゆもなし、

〔松屋筆記〕十あめのみかど并裳瘡ぞやみ

この榮花に、あかもがさといへるは、痲疹の事にて、今いふはしか也、ぞやみは今俗に序病ジヨヤミとい

ひ、又某がぞになりてなどもいへり、序の字音によれる詞也、

〔百練抄白五〕承暦元年今年上自后宮大臣、下至庶人皆煩赤斑瘡、親王公卿已下逝去者多、權右中辨

師賢一人免此難、

〔皇年代略記白河〕承暦元年丁巳十一月十七日改元、依疱瘡、早魃也、

〔赤斑瘡辨考證五〕按に、いづれも承暦元年赤斑瘡流行の時の事にて、疱瘡と書るは、れいの通用

なり、

〔扶桑略記白三〕承保四年八月六日癸未、今上第一皇子敦文親王薨、年僅四歳、上自一人、下至庶人、莫

不患赤疱瘡矣、親王公卿五位已上、逝去之者多焉、

〔榮花物語布三十九〕引九としかはりぬれば、承保四年、元承元承暦といふ、略中略中四五月ばかりより、あかもが

さといふこと出て、世の人やむなど聞ゆるに、六七月になりては、いみじうやみまさりて、のこ

るなくきこゆ、五十三年にいできたれば、おいたるわかきとなく、おやこもわかず、ひとたびにや

みければ、おきたる人すくなくありける、六七十の人は、人のもとにもすくなければ、いとみじ

く、なんありける、むかしなんか、るもがさいできたりける、かんのとの子子○綏綏のうせさせ給ひし